

海藻群落維持機構基礎研究

(予算区分 県単 研究期間 平成 14 年 ~ 16 年度)

伊豆分場

【研究の背景とねらい】

- 海藻群落（藻場）は沿岸生態系において一次生産者の役割を果たすとともに、魚類等の産卵場や成育場としての機能を有し、葉部は貝類の餌料となるなど水産上極めて重要な資源です。また、海中の窒素やリンを吸収し、水質の維持にも貢献しています。
- 本県では海藻群落が磯焼けにより大規模に衰退した海域や近年減少傾向にある海域が存在し、漁業被害をもたらしています。今後、人為的に海藻群落を造成し、これを安定的に維持又は拡大する技術の確立が望まれ、そのためには既存の海藻群落を調査し、群落の構造（構成種、現存量）や維持・変動要因を明らかにしておく必要があります。

【研究成果】

- 県内沿岸 50 ヲ所の地先海域について、漁業者を対象に聞き取り調査を実施し、海藻群落（藻場）の分布や変遷状況を把握しました。変遷状況について、伊豆半島ではテングサ類からカジメ、アントクメ、ホンダワラ類等の大型褐藻類への変化が起きていました。駿河湾西部では磯焼けにより海藻群落が消失し、内浦湾南部ではホンダワラ類の群落（ガラモ場）が衰退していました。
- 県内 8 ヲ所の地先海域で潜水調査を実施し、海藻群落の種組成や現存量等を調べ、群落構造の季節変化を明らかにしました。また、各地先の水温データを収集しました。
- 聞き取り調査と潜水調査の結果から、本県では主にカジメ、アントクメ、ホンダワラ類等の大型褐藻類や紅藻テングサ類の海藻群落が単独又は複合して藻場を形成していました(図1)。また、海藻類の生育種の地域差や海藻群落構造の変化には、水温環境が深く関係している可能性が示されました。



図1 本県沿岸域における藻場の分布と主な構成種

【研究成果の普及方法】

本研究により得られた海藻群落（藻場）に関する基礎情報は、藻場造成技術の確立に貢献できるとともに、これからの藻場研究や磯焼け対策の基礎資料として活用できます。

(作成 平成 17 年 3 月)